

アメリカとヨーロッパ

揺れる同盟の80年

渡邊 啓貴 2018 中公新書

渡邊啓貴著

アメリカと ヨーロッパ

揺れる同盟の80年

Chapter

- 第1章 アメリカは「招かれた帝国」なのか
- 第2章 アメリカの覇権下での同盟の安定
- 第3章 米欧同盟の動揺—揺れるヨーロッパ
- 第4章 デタントの時代
- 第5章 新冷戦から冷戦終結への序曲
- 第6章 冷戦終結と米欧関係
- 第7章 増長するアメリカとヨーロッパ—「協調と対立」の同盟の本質
- 第8章 米欧蜜月時代は続くのか
- 終章 トランプショックとヨーロッパ—「協調と対立」構造の中の同盟



米欧

本書の目的(まえがき より)

米欧関係史の全体像を描写

- ・ 軍事・安保以外のあらゆる分野の関係

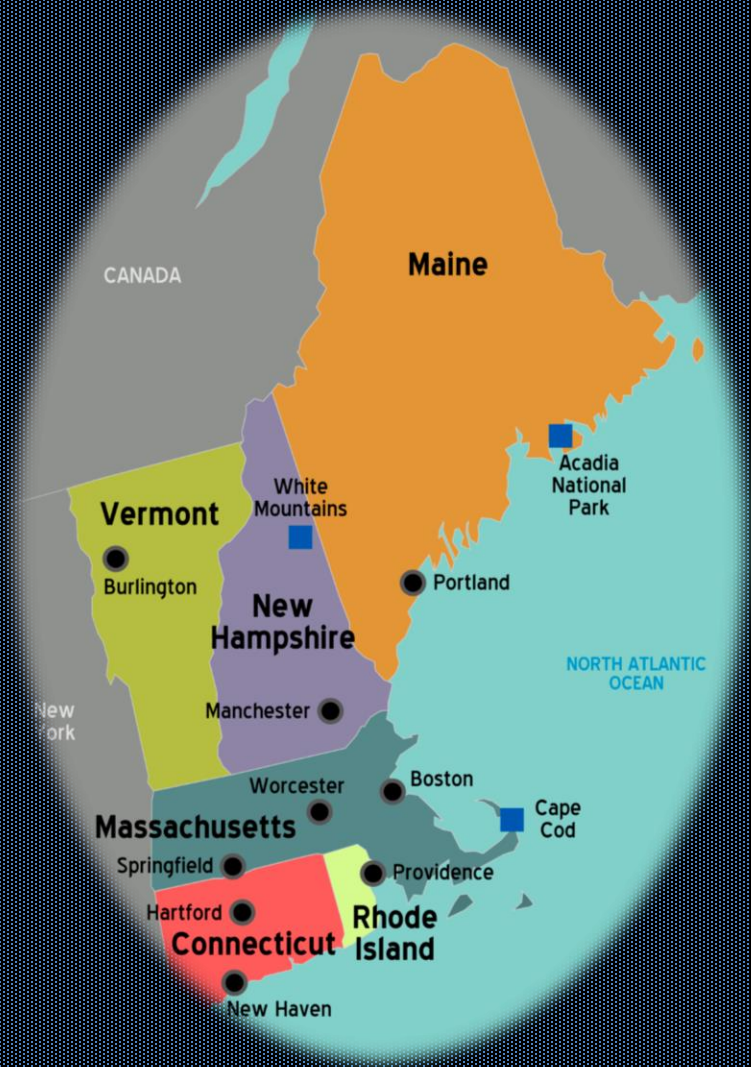
日米関係を考える大きな参考

- ・ 米欧史を通して日本外交の立ち位置を相対化

米欧関係とそれ以外のアメリカ外交との違い



第1章
アメリカは「招かれた帝国」
なのか



1. 米欧関係の始まり・大戦

a) アメリカの誕生、19世紀

ア) ピューリタンの欧州脱出

イ) ニューイングランドの理想社会建設

b) 「アメリカらしさ」の追求

ア) 独自の文化的核心の創造の必要性

I) 理想追及の一方で伝統という高い壁の矛盾

c) 米欧関係の逆転

ア) 1898年米西戦争のアメリカ勝利

I) キューバ独立、プエルトリコ・グアムを支配
下、フィリピンの買収

II) 米の工業力、軍装備を欧州各国に誇示

2 戦後復興と冷戦

a 終戦後欧州とアメリカの支援

ア) イギリス

- i) 米のヨーロッパ全体への引き込み
- ii) 英は東西冷戦の急先鋒
- iii) 英国内は甚だしい経済的困窮、インド、パキスタン放棄、パレスチナ撤退

イ) フランス

- i) 1944年に米がドゴールの臨時政権を承認
- ii) 米に歩み寄りも、自国優先的な支援の要請
- iii) 仏独自外交の片りん

ウ) ドイツ

- i) 敗戦国、虚無
- ii) 45年8月ポツダム会談でドイツ全体とベルリンを米英仏ソによる占領が決定
- iii) 米はトルーマン政権下で西ドイツの西側陣営化路線



2 戦後復興と冷戦

b) 米の反共政策

ア) 米英の反共外交

i) チャーチルの「**鉄のカーテン**」演説

ii) ギリシャ内戦の米介入

iii) 米中央情報局(CIA)の各国への介入

イ) マーシャルプランと封じ込め

i) 1947年提唱ヨーロッパ支援計画

ii) 当初は墺・ハンガリー・チェコスロバキア・ポーランドなど東欧諸国も対象

iii) 決定打:48年**2月**チェコスロバキア**政変**



3 NATO誕生と発展

a ベルリン危機と冷戦の固定化

ア 西側陣営による西ドイツ再軍備はもはや公然

イ 48年4月、ソ連はベルリンと西ドイツ間の通行管理を強化

ウ 6月18日、米英仏によるドイツマルク導入、ソ連は猛反発、ベルリン封鎖

エ 翌年5月、東西はそれぞれ憲法採択、西ドイツ初代首相はアデナウアー





3 NATO誕生と発展

b 1949年4月4日北大西洋条約調印

ア 経緯:二月事件で北大西洋共同防衛体制が
重大化

イ 加盟:英仏ベネルクス米加、ポルトガル、デンマークら
10国

ウ ポルトガルはアゾレス諸島、デンマークはグリーンランドが重要視

c NATO発展の50年代

ア パリ協定で西ドイツのNATO加盟

イ トルコ・ギリシャ・スペインの加盟

ウ 集団防衛機構から安全保障共同体へ

d 欧州で米に対するポジティブ印象、大衆文化の普及

第2章 アメリカの覇権下での同盟の安定

- 1 ソ連はスターリンの死、フルシチョフ首相
- 2 アメリカの傘の下
 - a 米の50年代は核装備の強化、西欧への配備
 - b 時代は戦略爆撃機から弾道ミサイルへ
 - ア 1957年ソ連のスプートニク打ち上げは西側に衝撃
 - イ 米は欧州同盟国への中距離弾道ミサイル配備計画
 - c 西ドイツ核保有
 - ア 西独は核保有の野望
 - イ 米仏は西独の単独核保有阻止のため、**欧州原子力共同体(EURATOM)**設立



3

植民地における米欧の交代

a インドシナ地域へのフランス
介入

ア「共産主義からの防衛」
理論で正当化

イ 仏は米に支援を要請、
支配者の交代を意味

b スエズ危機(第2次中東戦争)

ア 経緯

- i 1956年、英米世銀がエジプトのアスワンハイダム建設の融資を撤回
- ii エジプトの**ナセル大統領**が**スエズ運河の国有化**宣言
- iii 11月5日、英仏がパラシュート部隊でエジプト侵攻
- iv エジプトは翌日に組織的抵抗終了

イ 国際社会の反応

- i 米はこの「**植民地的侵攻**」を非難、英仏に停戦要求
- ii 米の欧州に対する圧倒的優位の誇示



4 ドイツ問題再び

a ドイツ統一問題再燃

ア 58年11月、ソ連は西ベルリン非武装化要求

イ 最後通牒のニュアンス

b 1961年8月

ア 13日、東ドイツ、ベルリンにバリケード構築

i 背景：東から西への労働力層の流出

ii 東ドイツの労働力ひっ迫

イ 17日、コンクリート壁が構築

ウ 西側にリアクションなし

エ アデナウアー西独首相は米と決別、仏に接近

4 ドイツ問題再び

a ドイツ統一問題再燃

ア 58年11月、ソ連は

イ 最後通牒のニューア

b 1961年8月

ア 13日、東ドイツ、ベ

i 背景:東から

ii 東ドイツの労

イ 17日、コンクリート

ウ 西側にリアクション

エ アデナウアー西独前



BERLINER MAUER 1961 - 1989



第3章 米欧同盟の動揺 揺れるヨーロッパ

- 1) ケネディの構想「大西洋共同体」
 - a) 欧州復興から米欧関係の仕切り直しの必要性
 - b) NATOの柔軟反応戦略
 - ア) 通常戦力、戦術核兵器、戦略核兵器の3段階
 - c) MLF(多角的核戦力)構想
 - ア) NATO指揮下における核戦力構想
 - イ) 仏は米の「ジュニア・パートナー」に過ぎないと懸念
 - ウ) 英仏などが反対、66年に正式に棚上げ

第3章 米欧同盟の動揺 揺れるヨーロッパ

2) ドゴールの挑戦と離脱

a) 1958年、ドゴール米英に書簡

ア) NATO体制改革の要請

イ) 60年5月パリでの米英仏ソ会談構想

i) ドゴールによるリーダーシップアピール

ii) フルシチョフのボイコットにより失敗

b) **フーシェ・プランとエリゼ条約**

ア) 仏中心の政治統合「フーシェ・プラン」

i) オランダ・ベルギー反対で実現せず

イ) 独仏のみの政治協力「エリゼ条約」締結

2) ドゴールの挑戦と離脱

c) NATO軍事機構の離脱

ア) フランスのNATO軍事機構の離脱

i) 1966年2月21日

ii) 離脱は軍事的枠組みのみ、離脱の影響は小

第4章デタントの時代

- 1) キューバ危機ののち、米ソ緊張緩和
 - a) 米：独統一の為に東西関係改善
 - b) 英：「欧州宣言」構想、東欧諸国との意見不一致
 - c) 仏：ドゴール単独のソ連接近
- 2) 西独ブランド外交
 - a) ソ連共産主義体制の変化を促進
 - b) 1970年8月モスクワ条約
 - ア) 国境不可侵、東西独国境承認、
 - c) 同年12月、ワルシャワ条約
 - ア) ポーランド西部国境策定(オーデル・ナイセ川)



- 3) デタントから「力による平和」へ
 - a) 英仏西独で政権交代
 - b) ポルトガル・ギリシャ・スペインの左傾化
- 4) 米ジミーカーター政権
 - a) 1977年、中性子爆弾の開発提唱
 - b) 欧州各国は反対
 - c) コスト高を理由に撤回

第5章新冷戦から冷戦終結への序曲

1) 新たな冷戦

a) ミサイル危機

ア) ソ連が新型SS20ミサイルを配備

イ) 米は中距離核戦力(INF)を配備

b) ソ連のアフガニスタン侵攻

ア) 米はモスクワ五輪ボイコット

イ) しかし他の同盟国は選手派遣

2) 冷戦終結の兆し

a) レーガン政権の政策転換

- ア) 1983年11月のNATO大規模演習
- イ) レーガンの予想以上のソ連の怒り・反応
- ウ) これ以後レーガンは東西協調路線へ

b) 米ソ軍縮の動き

- ア) ゴルバチョフ書記長就任
- イ) 欧州各国からのミサイル撤廃
- ウ) 西側指導者達のゴルバチョフへの期待

第6章 冷戦終結と米欧関係

- 1) 冷戦の終結とドイツ統一
 - a) 89年11月9日ベルリンの壁崩壊
 - b) マルタの米ソ首脳会談で冷戦終結宣言
 - c) 90年5月18日東独が西独に編入、ドイツ統一
- 2) 冷戦後のNATO
 - a) 冷戦の終結は地域・民族紛争の激化を意味
 - b) 対ソから紛争解決へ
 - c) 91年10月、バルト三国が準加盟国に
 - d) 東欧拡大へ
 - ア) 99年4月チェコ、ポーランド、ハンガリー加盟
- 3) 冷戦後のNATO防衛や紛争介入で米欧対立

第7章 増長するアメリカとヨーロッパ 「協調と対立」の同盟の本質

- 1) 9.11の米欧協力
 - a) NATO全体の攻撃と認識、集団的自衛権発動
 - ア) 「価値の共有」としての同盟
 - b) EUの米支援宣言
- 2) 米イラク攻撃の米欧
 - a) ブッシュ政権のキリスト原理主義的論理
 - b) 欧州各国は懸念
 - c) 2003年3月19日イラク攻撃

第8章 米欧蜜月時代は続くのか

- 1) オバマ大統領誕生
- 2) ヨーロッパはオバマを歓迎、関係発展に期待
- 3) オバマ政権「多国間主義」
 - a) ESDP(欧州安全保障防衛政策)を支持
- 4) オバマの巧みな外交
 - a) 軍事費の削減と平和構築・予防外交の積極化

終章 トランプショックとヨーロッパ

- 1) トランプの排外・孤立主義
 - a) EUへの鉄鋼・アルミ製品にそれぞれ25%、10%関税
 - b) EU・カナダはWTO提訴の意向
- 2) トランプ孤立主義の中の欧州防衛体制
 - a) メルケル独首相の強い姿勢
 - b) 独仏にイタリア・スペインの四大国防衛協力
 - c) 2017年12月、常設軍事協力枠組(PESCO)

まとめ

- 1) 米欧関係は常に流動的
 - a) 大戦後の米による欧復興のリーダーシップ
 - b) 60年代欧州復興による関係の齟齬
 - ア) スエズ危機; ベトナム戦争; パレスチナ問題...
 - イ) 協力と対立の繰り返し